

現代における「昭和ノスタルジア志向」に関する一考察

○立正大学 浅岡 隆裕
青木久美子

1. 目的

昭和のノスタルジア（郷愁）を喚起するようなイメージ形成にメディアが深く関与している（浅岡，2012）。こうした特定のメディア表象を受け入れる生活者側の社会心理の解明が今後は求められる。ところで1990年代後半から“昭和30年代ブーム”が継続しているが，こうした社会現象はもはや一時的な流行に留まるものではなく，一つの生活者の社会的態度，志向として定着したのではないだろうか。本発表でいう「昭和ノスタルジア志向」とは，昭和時代（特に昭和30年代）の実体験を懐かしむ気持ちを指すだけではなく，その時代にあったと考えられている特定の価値観や行動に範をとり，現代人としての生き方の再考を促すような考え方，あるいは行動，と定義しておく。こうした意識が形成・保持されている社会的要因を考察する。

2. 方法

東京都内の「家をのこし，暮らしを伝え，思想を育てる」ことを標榜する私設の展示施設の協力を得て，その友の会会員に対するインタビュー調査を実施した。調査対象は，会員のうちコアメンバーといわれる人々であり，主な質問項目としては，①昭和の暮らしに対する認識，②「懐かしい」と感じるもの，③昭和をテーマにしたメディア経験，などである。さらに不定期刊の友の会会報のドキュメント分析を行い，その語りの語彙の中から，昭和ノスタルジア志向がどのような価値観と親和性がみられるのかについて調べた。

3. 結果

語られた語彙の中から，昭和的な価値観と認識されるものとして挙げられているものについては，多少のバラエティはあるものの，ある程度の共通性が見いだされた。調査対象者の中では，特に昭和30年代を経験していない若年層では，昭和の家事や暮らしの仕方・知恵に対する憧憬が明瞭に語られている。また若年層において昭和の事物について全面的に肯定するわけではないが，よいと思われる要素（価値観，行動）を自身の現代的な生活に取り入れていくといった態度も看取された。

調査対象者においてこうした昭和の暮らしに対する態度が醸成されている背景としては，昭和の暮らし方を保存するのみならず，実践する場所として，この私設の展示施設が機能していることがあるだろう。また，当時のリアルな体験を持っていない世代では，メディアで接触したという要因もあるが，別の要因として，育った環境（たとえば，祖父母との同居経験）などによっても昭和ノスタルジア志向が形成されていることが明らかになった。

4. 結論

「昔はあったが，今では失われてしまったもの」を求める社会的動機が昭和ノスタルジア志向の中核をなし，現代社会において今後の暮らし方を考える参照点として昭和時代が挙げられている。なおインタビュー結果で得られた説明図式がどの程度一般的な妥当性を持っているかについての量的な検証を今夏予定しており，その結果についても発表で触れていきたい。

参考文献

浅岡隆裕，2012，『メディア表象の文化社会学—〈昭和〉イメージの生成と定着の研究』ハーベスト社。